

周辺からの記憶 14

～2014 年度 日本コミュニティ心理学会・むつ～

村本邦子（立命館大学）

2017 年 2 月 11～12 日、熊本へ行ってきた。全国婦人相談員連絡協議会で、災害時緊急相談マニュアルを作成しようとしている。もともと熊本は私のフィールドで、十年来通ってきた場所だ。熊本地震を受けて、昨年 5 月、7 月と訪ね、5 月に行くことになっているが、時間を見つけて、間にもう一度行っておきたいと思っていたものだ。

馴染みの相談員 4 人が集まってくれた。相談現場は日常を取り戻しているが、新規受付ケースが増えている。地震の影響で住民票が移動していることも関係しているだろう。アルコールと暴力問題が増えている。夫による DV だけでなく、息子など成人した家族の暴力で、避難する場がないというケースが多い。東日本大震災 1 年後の仮設住宅で、成人した息子の暴力で警察が呼ばれても、手の施しようがないという悩みを聞いたことを思い出す。なぜか妊娠が増えているという話もあった。年齢、婚姻の有無などに関わらずということのようだが、相談現場に上がってくるという意味では、今後のフォローが必要になるケースだろう。

親子支援に関わっておられる方々の話も聞きたいと、人を介して、NPO 法人くまもとスローワーク・スクール代表の入江真之さんと、NPO 法人子育て応援おおきな木代表の木村由美子さんを益城に訪ねた。早く着いて周辺の様子を見ながらブラブラしていると、「益城四賢婦人生誕地」の看板が眼に入った。調べてみると、益城の矢嶋家は、「熊本の猛婦」「四賢婦人」と称され、近代日本における女子教育や婦人解放運動に尽力し、今日の男女共同参画社会の礎を築いた女性 4 人を輩出しているのだという。矢嶋楫子は、日本基督教婦人矯風会を設立し、婦人参政権、廃娼、禁酒の運動に尽力し、東京女子学院を創立した馴染みのある女性だ。記念館まで行ってみたが、被災して休館中だったが、偶然の出会いだ。入江さんと木村さんからは、被災直後の親子の様子や外部支援者の問題などについて聞くが、彼女たちは今、益城に民間の女性センターを建てるべく計画中ということで、一緒に構想を練る。四賢婦人の益城に女性センターなんてとワクワクするではないか。今後の展開が楽しみである。

日本コミュニティ心理学会

第17回大会シンポジウム

2014年、日本コミュニティ心理学会第17回大会長を引き受けることになり、6月6日～8日、立命館大学にて大会を開催した。ちょうど十年前にも立命館で引き受け、被害者支援とコミュニティをテーマにしたが、今回は、コミュニティ・エンパワメントをテーマに、「東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント」のシンポジウムを企画した。シンポジストは、上山真知子さん（山形大学）、吉浜美恵子さん（ミシガン大学）、団士郎さん（立命館大学）、コメンテーターは、学会長の久田満さん（上智大学）。鞍馬山に写真を撮りに行って、ポスターも作った。



<ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援>

上山さんは、「ソーシャル・キャピトルを活用した心理社会的支援について」と題し、被災地に暮らし、支援される側として経験したことから考え学んできたことを語ってくれた。上山さん自身も、避難所に子どもの遊びコーナーを作り、「ケア宮城」という組織を立ち上げ、教員の支援などされている。東日本大震災発生直後から、心理の専門家が被災地に入り、いわゆる「心のケア」が開始されたが、PTSDモデルに偏りがちであることに違和感があった。被災者のほとんどすべては健康な人なのである。そんな折、プランジャパンという国際NGOとつながり、「心理社会的な支援」という考え方を知った。被災者の尊厳を守りながら、ニーズを聞き取り、地域の社会資源を活用して、被災者自らの力で困難を克服することができるように支援することを理念とする。

また、政治・社会学者である米国パデュー大学のダニエル・アルドリッチ氏との交流から、復興過程におけるSocial Capital (SC: 社会的関係資本) の有効性について学んだ。SCには、それぞれのコミュニティで維持されていた結束型、コミュニティ外からのボランティアなどによる橋渡し型、行政によるまちづくり政策にみられるような連結型があるが、SCを利用し地域を活性化することが復興の力になる。被災した直後はそれまでのコミュニティがすぐには機能できない状態にあって、結束によって乗り越えたとしても、その結束が強すぎる場合には、時として、支援を拒んだり、内部で対立が生じたりすることもある。橋渡し型は、一部欠損

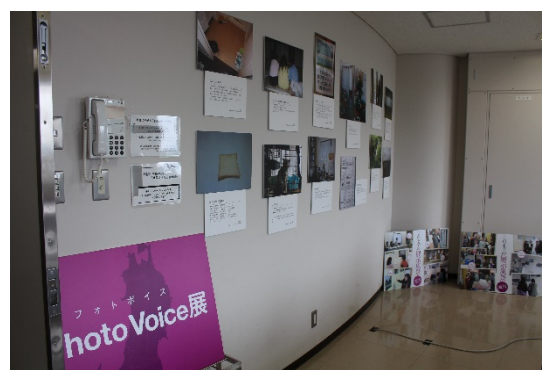
したビルに足場を組み、補修工事をしながら復旧させる働きをするようなものである。コミュニティの持ち味を生かしながら、人とコミュニティを支えるために、そこに暮らす人たちに違和感のない場や装置を持ち込んで支援することの有効性を実感したということだった。

<女性たちのフォトボイス>

吉浜さんは、社会福祉の立場から、「被災した女性たちのフォトボイス」というタイトルで話してくれた。フォトボイスとは、社会や地域の課題を掘り起こし、その解決のために広く用いられている参加型の手法で、とくに社会の中で脆弱な立場にある者の権利や福祉の向上をめざした調査研究や社会的アクションに多用されている。実は、学会プレ企画として、前日には、吉浜さんによるフォトボイスのワークショップをやり、これがかなり面白かった。

フォトボイス・プロジェクトは、2011年6月にスタートした。地元NGOとの協働で、郡山、仙台、宮古、福島にグループが立ち上がった。参加者を募集し、十分なオリエンテーションの後、それぞれが撮った写真をもとに語り合うことを繰り返すなかで、声(メッセージ)が浮かび上がってくる。たとえば、避難所での「偏った食事」「命をつないだ食パン」「街がごみ置き場になってしまった」「開けられない冷蔵庫」「猫の孤独」「鎮魂の浜」などなど。復興の意味について問いかける写真、復興によって作られるものや壊されるものの写真、オリンピック招致に対しての問いかけや怒りも表現された。

エコロジー・レベルを通して、フォトボイス・プロジェクトで撮られ語られた写真や声を見ると、これまで社会より大きなnature(自然)というレベルをあまり考えていなかったということに気づいたという。発足から3年がたち、フォトボイス・プロジェクトをNPO法人化したところだそうだ。学会場でフォトボイスの展示も行った。



<家族漫画>

団さんからは、「東日本・家族応援プロジェクト」と家族漫画展。詳細はすでに書いてきた話だから詳細は省略するが、どんなふうに家族漫画展が始まり、続いてきたかということ話を話した。

私達は皆、沢山の物語の束として今を生きている。多くの人々と共有する物語から、誰にも明かすことなく胸に秘めた物語まで、様々な記憶と共に人生を過ごす。ところが、余りにも大きな厄災に見舞われると、ささやかに大切にしてきた物語は吹き飛ばされてしまう。回復しがたいとも思われる深い悲劇で私達が一色に染められてしまう。

だから回復の一つは、共通の大きな物語に絡め取られた人達が、何処かに押しやら

れてしまった個人の物語を取り戻すことではないか。被災した街々もまた、被災地という一括りのカテゴリーから、固有名詞を取り戻す事なのではないか。その一助に、誰かの小さな物語が役目を果たすのではないかと考えた。

シンポでは「花嫁の父」をスライドショーにして見せ、学会会場にも、家族漫画パネルを設置した。



<コメント>

学会長の久田さんは、「御用聞き」として福島に出向いている自身の活動ともからめながら、それぞれの企画すべてがどこか楽しそうで持続的であること、現地の地理と歴史が大事であること、エコロジカルな視点から、時間の変化に伴って個人がどう変わるのか、家族がどう変わるのか、コミュニティがどう変わるのか、さらにそれを取り巻く文化、社会、イデオロギーがどう変わるのかということを観察し、できる範囲の小さなことをひとつひとつ付け加えながら細く長くやっていくところに何か新しい価値が見出せるのではないか。

漫画展は、コミュニケーション・アクション

(対話というアクション)であり、来場した人が漫画を見ても見なくても、そこにコミュニケーション・スペース(対話する場)を作り出している。漫画と来場者、来場者同志に対話が生まれ、そこから何かが生まれるのだらうとコメントしてくれた。



<星野命先生の遺言>

懇親会において、名誉会員だった故星野命先生が挨拶のなかで、このシンポジウムについて言及し、期待を語ってくださった。

三人の話題提供者がそれぞれユニークで、また蘊蓄を傾けた内容を語ってくださったことに、大会長の「人選の妙」を感じ取りました。・・・

・・・これからの第二世代、第三世代にあたる会員の方々に私が期待し、お願いしたいことは、現代心理学、社会福祉学、教育学等の分野に所属しておられるとしても、「コミュニティ・アプローチ」と「エコロジカル・アプローチ」の重要性と実効性を活かして、大自然をバックにしつつ、個人・家族・組織・地域社会のすべてを包括した実践と

研究を推進して頂きたいことです。

本大会のシンポジウム、ワークショップでは、新らしく創造的な研究法がいくつも紹介され、「フォトボイス」、「ソーシャル・キャピトル、とくに橋渡し法」、「物語始める人の発見と聴き取り」、「家族漫画パネル」など、私にとって活用をはかることは、ゾクゾクする体験になりそうですが、残念なことに「時間」がありません。不可能なこととして「あきら」目ています。

星野命先生からは、後日、この時の挨拶原稿メモを手書きで清書したものを送って頂いた。学会には金沢から駆けつけ、老体で弱っているのだとソファに横になって休みながらも、熱心に参加して下さった。高齢になって頭は冴えて仕方がないのだが体がついてこず、飲み込むことが難しいとおっしゃっていた。翌年の学会にはもう姿を見せることなく2015年11月7日肺炎のため88歳でご逝去された。これを星野先生の遺言として、私たちの方向が違っていないことを確認しつつ、精進したいと思う。



星野命先生と 2014. 6. 7

4年目のむつ

<準備>

早4年目のプロジェクトである。昨年、弘前に移動になってしまった杉浦裕子さんが、4月1日付で、むつ児童相談所の課長として戻ってきたと知らされた。公民館長が図書館長になり、新しい公民館長はむつ市長とも親しいということで、地元のプロジェクト理解者が着実に増えている。5月には第1回プロジェクト実行委員会が開催され、初回は少々参加していた人たちも、継続されて4回目になることから10年企画の意味を理解し、「今から次年度のことも踏まえたPRせねば」「内容が良いのはアンケートの結果から明らかで、こんな良いものを殆どの市民が知らないことを何とかせねば」との声が挙がっていたと知らせてもらった。

第2回実行委員会は6月ということで、立命館の方でもM1に向けてプレゼンし、説明会を含めた準備のための第1回研究会を6月に設定した。5月20日、事前準備の

ため、むつ市の HP を覗いていたら、前日、むつ市長が急逝したというニュースが目飛び込んできた。驚いて HP を繰ってみたが、その前の市長も若くに急逝していた。合わせて、市長らの苦闘と重圧をうかがわせるむつの歴史を知った。何とも言葉が出ない。

杉浦さんからは、「むつ市長が5月19日、会合中に倒れて逝去。62歳でした。そんなこんなで、市長選でもめています。元気であれば、今年はプロジェクトに顔を出していただける予定でしたが」とメールがあった。残念だ。結果として、宮下順一郎前市長の息子である宮下宗一郎氏が市長を引き継いだ。当時、宗一郎氏は外務省へ出向、在ニューヨーク日本国総領事館で政務部・経済部領事をされていた。このことがまた後のご縁へとつながることになる。

<フィールドワーク>

院生たちは陸路で下北へ。教員3名はいつものように夏休みを利用して、前乗りで青森巡り。昨年出会った感動の「嶽きみ」（トウモロコシ）を求めて岩木山へ。立て続けに何本も食べすぎて、お腹をこわした人もいた。



南八甲田山麓に広がる鳶の森で鳶沼巡りをして、開湯 400 年を誇る日本三秘湯「谷地温泉」へ。古びた木造の山の中の一軒宿。





き、「どうせ薬飲んででも血圧高いんだし、80年生きたらもうけもんだと思って、そんなに一所懸命薬飲まなくてもいいよ」と言ったそうだ。ナイスな先生だ。



温泉はもちろん豊かなフィールドワークの場だ。谷内温泉にて一緒になった青森市の年配女性とあれこれ話す。この女性、2011年から先月まで、毎月、岩手の避難所に慰問に行っていたとのこと。婦人会とか町内会とか組織立った慰問のようだったが、はっきりとはわからず。瓶や紙パックで花器を作って持って行ったり、作り方を教えたりしたらしい。

高齢者対象で、顔なじみになると、行くたびにとても喜んでくれた。花器にあまりにたくさんの花を入れるので、「入れすぎでしょう」と言うと、一本ずつこれは誰々の花・・と名前を言っていく。亡くなった方なのか。

弘前医大の先生も一緒に行ったことがあった。健康教室を開いて、「薬飲んでいる人？」と尋ね、手を挙げた男性に詳細を聞



彼女は、下風呂温泉の話題になると、「下北には核燃料貯蔵があるからね」と声を潜めたが、翌日は大間まで足を延ばした後、下風呂に向かう。内湯もあるが、せっかくなので、公衆浴場、大湯と新湯に行く。大湯の方は、ぬるいお湯と熱いお湯の二つの湯船がある。ぬるい方もかなり熱いが、こちらは水を入れていいのだと地元の方が気遣ってくれる。

湯船からふと眼を上げると、30代くらいの女性の背中に大きく見事な龍の刺青があった。こんなものを見るのは、映画を除けば生まれて初めてだ。このあたりの浴場では禁じられていないのだろうか。刺青の女性が連れらしき女性の背中を流していたが、何だかごく自然な光景に見えた。

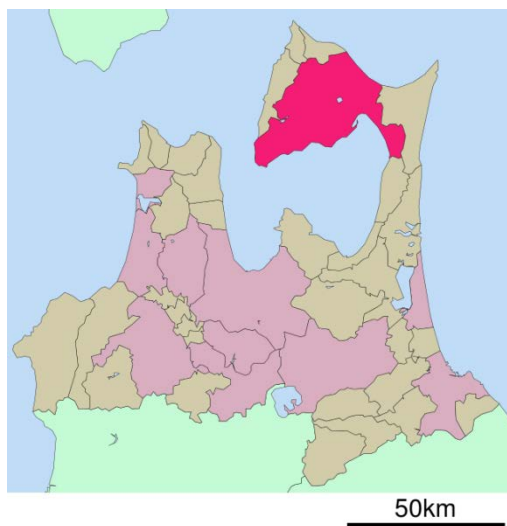
後で聞いた話では、このあたりには大間原発労働者用の宿があり、やくざ関係の人数が増えたのだそうだ。『ヤクザと原発』（鈴木智彦著、文春文庫）は興味深かったが、同じ地平の話なのだろう。

<9月4日レセプション>

例年通り恐山で身を清め、レセプションに向かう。むつグランドホテルのレセプションでは、児童相談所所長を筆頭にスタッフの皆さん、青森県PTA連合会会長やむつ市中央公民館館長なども来てくださっていた。今年はどういうわけか（下風呂の話をしたからか？）、原発関連の話がはずんだ。

名刺にある下北半島の地図を見ながら、むつ市でないところ、つまり下北郡が飛び地になっている理由を教えてもらおう。右から東通村、風間浦村（下風呂温泉のあるとこ

ろ)、大間町(おおまち)、佐井村。ちなみに、下の方(上北郡)には、野辺地町(のへまち)、七戸町(しちのへまち)、六戸町(ろくのへまち)、横浜町(よこはまち)、東北町(とうほくまち)、六ヶ所村(ろっかしょむら)、おいらせ町(おいらせちょう)がある。むつ市に統合されなかったところというのは、原発関連のお金が入るところである。郡として残すために、下風呂はじめ原発関連労働の宿を作ってお金を落とすということのようだ。



子どもの頃に見聞きした六ヶ所村の話も出る。「私たちみんなの問題ですよね・・・」と言うと、「心の中でいろいろ思っていると言えないし、結局はしょうがない。若い人たちは何も考えていないかもしれない」「うちの息子、考えてんのかな?」という声も上がっていた。タクシーの運転手さんも、「暮らしていると、考えても仕方ないし、考えてられない」と言っていたが、それをテーマの中心に置くことは困難なのだろう。

その後、むつ新市長とむちゅらんの話で盛り上がる。まだ若い市長は希望の星のようだ。地熱発電にも力を入れていると言っていた。PTA連合会会長とも話すが、ワークショップ形式のものは珍しいので、皆に経験して欲しい。このあたりでは、都会と違って、PTAと言えば男の会で、母親会というのが別にある。男たちが一緒にお酒を飲む。男尊女卑というのか、男女分離の傾向がまだ強く残っているという話だった。なるほど。

<9月5日 支援者支援セミナー・お父さん応援セミナー>

今年の支援者支援セミナーは市役所で。天気が良く、移動の際に釜臥山のレーダーがよく見えた。市役所は想像を絶する大きな平屋で、駐車場一角には僻地医療のヘリポートがある。それまで地震で壊れた3階を取り壊した役所を使ってきたが、老朽化で建て替えができず、東北電力が買い取ったダイエー跡なのだそうです。

中には、ジオパーク構想や下北の自然を推し出すパンフレットとともに、「原子力の安定確保に向けた現場力向上のための人材育成(青森原燃テクノロジーセンター)」、「原子力発電施設等研修(青森原燃テクノロジーセンター)」といったポスターや「原子力文化」「ひろば」といった原子力に関する雑誌が置いてあった。



いつものように、中村さんと一緒に、ワークショップ形式で事例検討を行った。60名の参加者を小グループに分け、むつの方から提供してもらった事例をもとに、家族の強みに着目した支援、専門家に頼るだけでなく地域の力を活かす支援を考えてみた。

最初は事例のあら捜しをしていた参加者も、グループで話し合うなかで、視野が広がり、全体で知恵を共有するとさらに大きな力になっていった。また、「虐待は児相や専門家の仕事」と言っていた人たちも、地域でできることがたくさんあるということに眼を向けることができたように思う。

毎年、セミナー参加者の半分は民生委員なので、その人たちがエンパワーされたら地域はもっとパワフルになるはずである。



夜は、中央公民館に移動して、中村さんによる「お父さん応援セミナー」。「女人禁制」なので、私たちは中に入れないが、どんな様子か気になってガラス越しに覗いてみる。30名の参加者で、そのうち10名がリピーターだったとのこと、少しずつ定着してきたかなと思う。





今回は、『臨地の対人援助学』出版企画のために、プロジェクトについて地元の方々の声を聴くということもやってみたが、むつみなさんが、忙しい日常のなかで、少しでも多くの人たちに届けるにはどうしたらいいのかと知恵を絞りながら、1年かけて準備をしてくださっていることが具体的によくわかり、大変ありがたく、大きな力をもらった。

<9月6日 漫画展・マンガトーク>

最終日はむつ市立図書館で、漫画トーク。きのうは漫画展に大間の議員を名乗る人がやってきて、大々的に原発PRをして、「明日もまた来る」と言って帰ったという報告を受けていたので、少し緊張するが、結局、その人は現れなかった。どんなことをしているか見に来たのだろうか。原発のことは考えるが、反対運動や賛成運動を目的にしているわけではない。

漫画展の感想ノートやアンケートを見ると、4年かけて蓄積してきた力を感じる。今年初めて出会ったという人もいれば、3回目、4回目という人もいる。「今年も来てくれた」と思いながら足を運びました。10年の

プロジェクトですが、毎年自分の1年と思いつつ漫画展を見ている」という声もあれば、「はじめて参加し、色々な意見を聞き合えたことは大変勉強になりました。私が先生のご本と出会ったのは、2011年初冬に岩手県遠野市にあるボランティアセンターに何度か足を運んだ時、『木陰の物語ー3.11への記憶ー』でした。そこから避難所を訪ねていた折に冊子の中のことがジワジワと染み込んできて少しずつ、そこからあったかいものが広がっていく不思議な状況を体感したのを覚えています」という声もあった。いろんな形で漫画展や冊子の力が広がっているのだ。





むつ市長も駆けつけ、反省会にまで参加してくれた。これからの展開が楽しみである。

続く

